

# □ ピアノ

## 真 嶋 雄 大

2016年最大の衝撃は、日本を代表するピアニスト中村絢子の訃報である。7月26日、自身の誕生日の翌日であった。一昨年春頃に腸閉塞を発症、手術をしたところ軽微な大腸ガンが見つかった。その後演奏活動を休止して治療に専念、昨年3月の浜松国際ピアノアカデミーには音楽監督として元気な姿を見せ、4月には日本パデレフスキ協会の副会長として設立に尽力していたのは今も忘れられない。私事で恐縮であるが、6月には手紙を頂戴し、そこには「2020年までの予定が入っていて病氣も吹っ飛んでいます」と記されていた。

今更ながら中村絢子の功績は著しい。大戦後、まだ西洋音楽が日本に根付いていなかった時期にピアニストとして脚光を浴び、日本人にクラシック音楽への関心を誘い、常に日本のピアノ界をリードしてきたのみならず、世界に日本のピアニストたちを紹介し、国際的に認知させることにも情熱を燃やした。それは20年間に及ぶ浜松国際ピアノアカデミー等に結実し、指導者としても幾多の才能を発掘、世に送り出してきたのである。さらに彼女は、日本、いや世界の音楽界を俯瞰し、現況をつぶさに分析し、将来的な展望や憂慮を詳細に、そして明快に解き明かすことのできる稀有の音楽家でもあった。

さて2016年である。前述と重複するが、3月には第20回を迎える浜松国際ピアノアカデミーが、ピオトル・パレチニらを講師陣に招いて開催され、最終日のコンクールでは、中村絢子が絶賛する、現在東京音大付属高に在籍する藤田真央が優勝、また20周年記念コンサートが全国各地で開催され、上原彩子、河村尚子、チョ・ソンジンらがステージで華を競った。4月には中村絢子自身が奔走して日本パデレフスキ協会を発足させ、内閣官房長官などを歴任した細田博之衆議院議員が会長に就任。協会は今年役員を一新させ、新たに再出発を目指している。

さてコンクール状況について。2月、前回までの海老彰子の任期切れに伴い、浜松国際ピアノコンクールの審査委員長に小川典子が決定した。4月には第6回野島稔・よこすかピアノコンクール（審査委員長：野島稔）が開催され、東京音大4年の鶴澤奏が優勝の栄冠に輝いた。5月、汐留ベビシユタイン・サロンにおいて、第1回ノアン・フェスティバル・ショパン・イン・ジャパン・ピアノコンクール（審査委員長：イヴ・アンリ）の本選が開催され、各部門の入賞者はフランス・ノアンでのコンサートやセミナーに参加。6月には第6回仙台国際音楽コンクール・ピアノ部門（審査委員長：野島稔）が行われ、第1位キム・ヒョンジュン（韓国）、第2位エヴァン・ウォン（アメリカ）、第3位北端祥人（日本）を得た。また同月、第8回安川加壽子記念コンクールが行われ、第1位上原琢矢（大阪芸大）、第2位吉見友貴（桐朋女子高）、第3位小林遼（東京音大大学院）、また10月には日本音楽コンクールで、第1位樋口一郎（桐朋学園大）、第2位千葉遥一郎（東京藝大）、第3位渡邊智道（東京藝大卒）という結果であった。

ここ数年、コンサート開催回数もほぼ同程度で推移していて、ピアノ関係の演奏会も活況を呈している。その中で東京藝大教授として日本のピアノ界を指導し続けた田村宏が没して5年、3月に東京文化会館でメモリアルコンサートが開かれ、小山実稚恵、田部京子、若林顕などが出演、5月には毎年恒例の「ショパン・フェスティバル2016 in 表参道」に小林仁、森知英、川村文雄、北川暁子などが登場、同月東京オペラシティの「コンボージム2016」関連コンサートには、作曲家一柳慧が自作の「ピアノ協奏曲第6番」を世界初演、自らのピアノ、秋山和慶指揮東京都響との共演であった。

6月には杉並公会堂の名物企画「3大ピアノ・プロジェクトピアノ三重弾」というガラ・コンサートが催され、この企画のプロデューサーでもある斎藤雅広他、近藤嘉宏、松本和将、宮谷理香、須藤千晴、そして富永愛子という6人の実力者たちがそれぞれの華麗なるピアニズムで聴衆を沸かせた。

また11月、田部京子はかつて取り組んだシューベルト・ツィクルスの完結から11年、新たに「シューベルト・プラス」というプロジェクトを始動、浅野真弓はヤマハホールで「ショパンとその時代」というレクチャー・コンサートに登場、音楽社会学者の野村三郎の講演とのコラボレーションで、ショパンの真実に切り込んだ。

それにしても驚かされたのは館野泉。今年傘寿を迎えた館野は11月、東京オペラシティにおいて、高岡健指揮東京シティ・フィルと共演、何と一晩に4曲の左手のためのピアノ協奏曲を弾き切ったのである。まさに快哉！渾身のコンサートであった。

メモリアル・イヤーを迎えたピアニストも少なくない。デビュー35年の清水和音は5月、ブラームスの2曲の協奏曲などでパティストーニ指揮東京フィルと共演して自らの著しい進境を吐露、デビュー20年を迎えた宮谷理香は、11月にショパンとシューマンで記念リサイタルを開催して喝采を浴びた。変わったところでは、生誕210年となるブルグミュラーのフェスティバルが横浜で開かれ、展示や音楽、また演劇と融合したワーク・ショップなどで盛り上がった。

来日ピアニストも相変わらず賑々しい。ダニエル・バレンボイム指揮シュターツカペレ・ベルリンが2月に来日、ブルクナーの交響曲ツィクルスを敢行、同時に弾き振りでモーツァルトのピアノ協奏曲数曲を演奏、ピアニストとしても重厚な境地を示した。4月には今年75歳を迎えたマウリツィオ・ポリーニが来日、ショパン、シューマン、ドビュッシーなどを実にみずみずしく、また端正ともいえる佇まいで演奏、高度なアプローチを示した。今年来日したユジャ・ワンと、マレイ・ペライアが2人ともベートーヴェン「ピアノ・ソナタ第29番『ハンマークラヴィア』」を採り上げたのも話題となったが、11月には、サントリーホール開館30周年記念として内田光子がマーラー・チェンバー・オーケストラを弾き振りし、そのモーツァルト「ピアノ協奏曲第17番K.423」と、同「第25番ハ長調K.503」はいずれも圧倒的な音楽的感興を創出した。

2016年は作曲家武満徹の没後20年にあたる。そのため武満作品を織り交ぜたプログラムを組んでいたピアニストも少なくなかったが、全曲武満作品で構成した高橋アキや、オリバー・ナッセンと組んだ高橋悠治らのコンサートが耳目を集めた。

さて楽器メーカーもそれぞれ新しい試みが続けており、ヤマハは9月、自動演奏機能付アコースティック・ピアノ「ディスクラヴィア」の新シリーズ「ディスクラヴィア・エンスパイア」を発表、これには従来のアンサンブル伴奏データに加え、オーディオ音源を再生できるデータが初搭載されている。2017年に創立90周年を迎えるカワイは特に新製品のリリースはないが、一旦ピアニスト引退宣言をしたミハイル・プレトニョフが同社の「シングル・カワイ」に出会って復活を遂げたのはよく知られており、今年もまた招聘してのクロズド・リサイタルを開いた。

ペーゼンドルファーは昨年発表した280VCが著しく好評で、アフアナシエフ、横山幸雄、久本祐子などに賞賛され、今年3月に来日するシフ・アンドラーシュも同モデルで演奏するという。またベビシユタインは、いずれもアップライトのマイナー・チェンジ・モデル「クラシック118C」、「同124E」、「コンサート8」を発表している。

尚、2016年は中村の他、富田勲（84歳）が5月5日に、コチシュ・ゾルタン（64歳）が11月6日に他界した。

その中村絢子を偲んで12月、横山幸雄、上原彩子、河村尚子、漆原啓子、そして提剛がチャイコフスキー「偉大な芸術家の思い出に」などを演奏、故人を偲んだが、改めて中村絢子の業績、世界の音楽界への影響力は甚大であり、その後任足り得る人材が現れることを切望しつつ、今はただ冥福を祈りたい。